

## 藤田嗣治《夢見る女》について

About Tsuguharu Fujita <Dreamy (Rêveuse) >

■ 成田 朱美 Akemi Narita

文化財保存修復研究所 研究員

*Researcher of Institute for Conservation of Cultural Property, Aichi University of the Arts*

### 作品概要

- 作品名: 夢見る女
- 作者: 藤田嗣治
- 所有者: 愛知県立芸術大学
- 寸法: 33.0×23.8 cm



図 1 藤田嗣治「夢見る女」

### はじめに

2017年に本学芸術資料館所蔵作品、藤田嗣治(1886-1968年)《夢見る女》(図1)を、自然科学的手法を用いて調査を行った。本稿は、本学紀要47号にその調査結果を掲載したのち、さらに来歴などを追調査したことで、新たに判明したことを報告するものである。

### 自然科学的手法を用いた調査により判明したこと

本作は画布に描かれ、木枠に張られている。フランスサイズのF4(33.0×24.0cm)に近い寸法である。

描かれている内容は、郊外のような自然の中に動物がいる図柄のタピスリーの前に、胸を露わにした女性が中央に配されているものである。人物は藤田らしく白く透き通った肌の質感をしている。反対に背景は、藤田作品では数少ない厚塗りのマティエールが確認できる。画面下の側面には描画が続いており、画面サイズの変更があったことが分かる。

裏面の画布には、右下に、変色の可能性も考えられるが、緑色のインクのスタンプが押されている。

調査により、白色の地塗りは、蛍光X線分析により、鉛白と硫酸バリウムを使用していることが分かった。

また、使用された色は、黒、茶、黄土、黄、緑、青、桃、紫が確認できた。これらの色の絵具は全て透明感があり、顕微鏡観察では、顔料の粒子が目立っている。

黒は、蛍光X線分析では元素は特に検出せず、藤田の作品によく見られる、機器では検出できない墨を使用していると推測した。茶は蛍光X線分析では鉄のみでマンガンを検出できなかったことから、シエナ土といった土性系顔料と考えられた。黄土はイエローオーカー、黄はジンクイエロー、緑はビリジアン、青はコバルトブルー、桃は弁柄といった土性系の赤色顔料が用いられていると判断した。紫は顕微鏡で観察すると、赤と青の混在が見られ、蛍光X線分析でもコバルトと鉄が検出され、コバルトブルーと弁柄といった土性系の赤色顔料を混色したと考えられた。

これらの顔料分析結果は、東京美術学校在学中の1909年に描かれた《婦人像》に用いられていた顔料分析と同じ結果であった。

### 制作年の考察

芸術資料館の記録によると、本作は制作年不詳となっていた。

紀要では「藤田が1920年代にパリ画壇で大きな成功を収めた頃に描かれた人物像の顔と、本作の顔を比較すると面長な顔であることがわかる。本作の顔は、少なくとも1930年以降に描かれたものに近く、全体感としては、晩年に描いた宗教画の形態といえるだろう。《聖母子》(1959年)や《礼拝》(1962-63年)に描かれた聖母マリアに見られる顔と類似して

いる。”と留めた。

サインからも、カトリック洗礼後の1959年から「L.foujita」と署名するようになっていたことを踏まえ、本作が「Foujita」と記されていることから、それ以前の作品と考察するようになっていた。

藤田の没後すぐの1968年に東京と京都で開催された追悼展に本作も出展されていることが分かり、その展覧会図録では1960年制作とされていた。

1978年に日動出版部から出版された『藤田嗣治画集』では、制作年は1956年となっており、その後出版された、藤田嗣治研究の第一人者で藤田嗣治の鑑定家シルヴィ・ビュイソン(Sylvie Buisson)女史の総作品目録であるカタログ・レゾネでは1956年のままである。

また制作年を決定づける事象として日動の画集に、本作に類似する、「タピスリーの前の少女」が掲載されている(図2)。

この作品は本作のようにタペストリーの前に人物を中央に配している。タペストリーの描画も、画集には白黒での掲載であるが、そこから観察するにも、本作と同様な描写である。

また、作品寸法は33.0×24.3cmである。本作とほぼ同じ大きさであり、連作であったことが窺える。

その「タピスリーの前の少女」の右下のサインには「Foujita 1956」と記されているのである。

日動の画集には、1956年の6月にはパリのペトリデス画廊で個展を開き、40点を出品していると、ある。

ペトリデス画廊で展示された際には皆同じ額に入れられていたようであるが、現額はペトリデス画廊でのシンプルな額とは異なり装飾絢爛になっており、額が替えられたことが考えられる。また、日動画廊に問い合わせたところ、画集の記述はビュイソン女史に口頭で聞き取り、掲載したといい、関係者は皆鬼籍に入っているということで、40点というリストの内容は不明のため、本作もそのうちの1点である可能性を残したままである。

以上の通り、本稿では制作年が1956年と判断した。

### 来歴の考察

本学芸術資料館が本作を1970年に購入したことが本作の箱に記録が残っている。

また、藤田没後すぐの1968年の追悼展に出展された際の図録には「日本 個人蔵」とある。そのため、藤田の生前である1956年から、1968年までの間に日本に入ってきたことが分かった。

### 裏面のスタンプについて

本作の裏面に押された緑色のスタンプ(図3)は、フランス政府の税関のスタンプということが分かった。

「DOUANE EXPORTATION PARIS CENTRALE」と書かれていることが、類似のスタンプ情報を持つ、東京美術倶楽部の靱井氏の協力により判別できた。

全てフランス語で、「DOUANE:税関、EXPORTATION:輸出、CENTRALE:中央」である。

なお、スタンプからは、輸出年の特定はできなかった。



図2 日動画集より抜粋「タピスリーの前の少女」



図3 当作裏面のスタンプ

なお、追調査には、東京美術倶楽部の靱井氏に多大なる協力を得たことを記し、ここに感謝いたします。